The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	榛原製罫紙と『懐徳堂紀年』 : 永井荷風と中井木菟麻呂
Author(s)	竹田, 健二
Citation	懐徳堂研究. 2012, 3, p. 73-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24654
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

榛原製罫紙と『懐徳堂紀年』―永井荷風と中井木菟麻呂―

竹田健二

『図書』二〇一一年四月号（第七四六号、岩波書店）に掲載された「断腸亭日乗と榛原紙舗」は、東京日本橋にある和紙の老舗・榛原（はいばら）と榛原の作る罫紙を愛用した永井荷風との関わりを中心とする、三田完氏の随想である。周知の通り、荷風は大正六年（一九一七）九月十六日から、亡くなる前日の昭和三十四年（一九五九）四月二十九日まで、「断腸亭日乗」と題する日記を執筆し続けた。三田氏によれば「紙フェチ」ともいうべき性向の持ち主である荷風は、「断腸亭日乗」の清書用の紙に榛原製の罫紙を選んでいた。

この三田氏の随想に添えられている「断腸亭日乗」の原本の写真を見て、筆者は大阪大学附属図書館の懐徳堂文庫で見た、よく似た罫紙を直ちに思い出した。それは、『懐徳堂紀年』に用いられていた罫紙である（図参照）。

『懐徳堂紀年』とは、懐徳堂の歴史をまとめた最初の書物であり、執筆者は、懐徳堂の学主を代々勤めた中井家の子孫・中井木菟麻呂（つぐまろ）である。木菟麻呂は大正三年（一九一四）十月から十一月にかけて、財団法人懐徳堂記念会からの依頼に応じてこの書物を書いた。当時東京に住んでいた木菟麻呂は、『懐徳堂紀年』の最初の稿本を手元に残し、浄書した『懐徳堂紀年』を大阪の財団法人懐徳堂記念会に送った。すると財団法人懐徳堂記念会の理事・西村天囚は、木菟麻呂が送ってきたものに修正・削除を加えて改めて浄書し、「財団法人懐徳堂記念会編」として、それを来阪していた大正天皇に献上した。大正天皇に献上された『懐徳堂紀年』は、現在、宮内庁書陵部に所蔵されている。また、木菟麻呂が手元に残していた最初の稿本は懐徳堂文庫の新田文庫に、木菟麻呂が財団法人懐徳堂記念会に送ったものは懐徳堂文庫の北山文庫に、それぞれ収蔵されている。[1]

図　北山文庫本『懐徳堂紀年』第三八葉裏。左下に「東京榛原製」と印刷されている。

筆者は二〇〇一年に『懐徳堂紀年』について調査を行った際、『懐徳堂紀年』は新田文庫のものも北山文庫のものも、罫紙の左下隅に小さく「東京榛原製」と印刷された同じ罫紙が用いられていることを確認していた。しかし、筆者の関心は専ら『懐徳堂紀年』の内容と、木菟麻呂が『懐徳堂紀年』を執筆した経緯とを解明することにあった。このため、榛原とは東京の紙屋の名前なのだろうと思うに止まり、特に追究はしなかった。三田氏の随想を読んで初めて、木菟麻呂が使った罫紙が東京日本橋の榛原製である可能性があること、そしてその店舗は現在も営業していることを知った次第である。

もっとも、三田氏の随想に添えられている「断腸亭日乗」の原本の写真を見る限り、荷風愛用の罫紙と『懐徳堂紀年』の罫紙とは、罫線の色が青（藍色）、匡郭が四周双辺であるところが確かに同じで、よく似てはいるのだが、細かく見ると違うところもある。

先ず行数が違う。荷風愛用の罫紙は毎半葉十行、『懐徳堂紀年』は毎半葉九行である。また、荷風の罫紙は版心下部に「〇」が印刷されているが、『懐徳堂紀年』は「〇」がなく、その位置には横線が二本ある。更に、『懐徳堂紀年』の罫紙には、左下の隅に「東京榛原製」と印刷されていたが、荷風の罫紙には「榛原製」と印刷されており、「東京」の文字が無い。

加えて、写真を見ただけでは分からなかったのだが、実は両者は大きさも違う。「断腸亭日乗」の大きさは、晩年のものを除くほとんどの巻が一八．四×一二．九cmで、これは罫紙を二つ折りにして袋綴にした大きさであるから、用いられている罫紙は一八．四×二五．八cm、つまりほぼB5と同じ大きさである。[2] これに対して『懐徳堂紀年』は、同じく袋綴で二七．二×一九．四cm、従って罫紙は二七．二×三八．八cmで、B4よりも一回り大

きい。

『懐徳堂紀年』の罫紙について何か情報が得られないものかと思った筆者は、二〇一一年七月十六日、上京した際に日本橋の株式会社榛原を訪問した。事前に連絡することができず、飛び込みの訪問となったのだが、折良く榛原の会長・中村晴子氏にお会いしてお話を伺うことができた。中村会長は、長らく品切れになっていた荷風愛用の十行罫紙の復刻を思い立ち、それを実現された方で、三田氏の随想にも登場する。(3)

中村会長のお話によれば、先ず罫紙の行数について、三田氏の随想には「十行から十三行」とあるが、榛原ではさまざまな行数の罫紙を作っており、九行の罫紙も作っていた、とのことであった。

また紙質について、罫紙に用いられる紙の中では荷風の愛用した薄い雁皮紙のものが最高級とのことである。しかし、筆者の記憶では、『懐徳堂紀年』の罫紙は薄くなかった。木菟麻呂が手元に残していた新田文庫の『懐徳堂紀年』の稿本には、本文に対して数多くの修正を加えた形跡が認められるのだが、その中には、罫紙の一部を罫線に沿って切り抜き、別の罫紙（恐らくは反故紙）で裏打ちをし、そこに修正後の本文を記している箇所が複数ある。(4) そうした修正箇所を観察した時の印象としては、罫紙は薄くはなく、むしろ厚ぼったかった。中村会長にそのことをお話しして、榛原では厚手の罫紙も製造・販売していたのかとお尋ねすると、雁皮紙を用いた高価な罫紙の他に、厚手でより安価な罫紙も作っていた、とのことであった。

更に中村会長は、榛原製の罫紙を用いた榛原の社内文書を筆者に見せて下さった。「明治四十四年」と記されたその社内文書に用いられていた罫紙は、毎半葉十一行のものであったが、やはり四周双辺で、さほど薄くはなく、大きさは『懐徳堂紀年』と同じであった。しかも罫紙の左下の隅に、『懐徳堂紀年』の罫紙と同じく「東京榛原製」と印刷されていた。

これを見た筆者は、木菟麻呂が『懐徳堂紀年』に用いた罫紙は、榛原製のものと断定してよいと確信した。安政二年（一八五五）生まれの木菟麻呂と、明治十二年（一八七九）生まれの荷風とは、ともに榛原で罫紙を買い求めていたのである。

中村会長はまた、罫紙の値段について、「断腸亭日乗」に記述があることを教えてくださった。後日「断腸亭日乗」を確認すると、大正十五年（一九二六）十二月八日のところに、以下の記述がある。(5)

十二月八日。曇爽風雨一過して後、暴暖初夏の如し。午後日本橋榛原に行き罫引雁皮帋手帳を購ふ。一冊金貳圓餘なり。先年（大正七八年）に比すれば殆二倍なり。哺時一天俄にかきくもり朔風砂塵を捲き寒亦加はる。（下略）

大正十五年（一九二六）に荷風が購入した雁皮紙の手帳が「一冊貳円餘」で、それが大正七・八年の値段の「二倍」ということは、大正七・八年（一九一八・一九一九）頃は一冊一円程度だったことになる。それより更に四～五年さかのぼる大正三年（一九一四）に木菟麻呂が購入した、大きくて厚手の罫紙の正確な値段は不明であるが、一円程度か、或いはそれよりも安かったのではないかと推測される。ちなみに、当時の一円は現在の五千円から一万円程度である。(6)

木菟麻呂は荷風に劣らず、明治から昭和にかけて膨大な日記を記した。『秋霧記』（明治三十四年七月～）・『鷦室記』（大正四年一月～）・『呉江日録』（大正十年九月～）・『弸中記』（大正十四年四月～）・『桜陵記』（大正十五年七月～）・『桜谷記』（昭和七年十月～）・『薜荔窩記』（昭和十二年六月～）・『後水哉館記』（昭和十四年四月～）と続く木菟麻呂の日記は、いずれも現在懐徳堂文庫に収蔵されている。『懐徳堂紀年』を執筆した頃の木菟麻呂の日記は『秋霧記』であるが、残念ながら、榛原で罫紙を購入したことに関連する記述はない。

経済的に恵まれた生活を送っていたわけではない木菟麻呂が『秋霧記』を書き記すのに用いた紙は、罫線のない普通の半紙や、反故紙を切り貼りしたようなものがほとんどで、非常に質素である。その木菟麻呂が、財団法人懐徳堂記念会から特に依頼を受けて執筆した『懐徳堂紀年』に、榛原製の罫紙を購入して用いたということは、木菟麻呂が『懐徳堂紀年』の体裁を可能な限り整えようとしたことを示していると考えられる。(7) しかし、木菟麻呂は荷風が愛用したような高価な雁皮紙の罫紙は使わなかった。木菟麻呂の人となりやその暮らしぶりの一端が窺える。

木菟麻呂の日々の行動や発言などがかなり詳しく記録されている木菟麻呂の日記からは、木菟麻呂自身に関する情報だけではなく、西村天囚・今井貫一・上松寅三ら懐徳堂記念会関係者に関する情報なども得ることができる。残念ながら、日記全体の分量があまりに膨大で、これまでその解読や研究は十分には進んでいない。しかし

ながら、その資料としての価値は極めて高く、近代日本の歩みを知る上でも貴重な日記の一つといえよう。多くの研究者が共有して活用できる資料にするため、今後は翻刻などの取り組みを一層積極的に進めていく必要があると思われる。

注

（1）拙著『市民大学の誕生―大坂学問所懐徳堂の再興―』（大阪大学出版会、二〇一〇年）参照。

（2）『荷風全集　第一九巻～第二四巻』（岩波書店、一九六三～一九六四年）による。

（3）榛原が復刻した十行罫紙にも二種類ある。一つは、「断腸亭日乗」に用いられたのとほぼ同じB5サイズの「日乗箋（小）榛原製青色十行罫紙」、もう一つは、B4サイズの「日乗箋（大）榛原製青色十行罫紙」である。

（4）拙稿「『懐徳堂紀年』とその成立過程」（『中国研究集刊』第三二号、二〇〇三年）参照。

（5）『荷風全集　第二〇巻』（岩波書店、一九六四年）による。

（6）飯塚一幸「書評：竹田健二著『市民大学の誕生―大坂学問所懐徳堂の再興―』」（『懐徳』第七九号所収、二〇一一年一月）による。

（7）『秋霧記』によれば、木菟麻呂は脱稿した『懐徳堂紀年』を製本に出し、また表具師吹埜に題簽を貼付させた上で、財団法人懐徳堂記念会に発送している。拙稿「『秋霧記』に記された『懐徳堂紀年』の成立過程とその献上」（『国語教育論叢』第一六号、二〇〇七年）参照。